

iPod の針(の論理)

関 口 久 雄

この思いを、あの人に、届けたい、と切に願い、限られた選択肢の中から、より適切であろうと思われる、その手段を選ぶ。

いわゆる過去に起きた出来事は単なる昔話ではない、振り返れば、点ではなく、線としてつながっている、時には面として現在を覆ってしまうこともある。ゆえに、その歴史を省みず、自らのわずかな知識と経験から、しかも他人事として、短絡的に、今の時代は〇〇だ、と騒ぐことほど愚かなことはない。ただし、「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず」といった先人の知恵に耳を傾けるとともに、澱んだ世界に明るい未来は訪れないということも失念してはならない。そして、新しいものは、単に目新しさだけで、評価されるものではない、それらは「未来にある普通のもの」となるために、この世に生まれてくるはずだから。たとえば、今では、だれもが当然のように使用している、音声／音楽をデジタル形式のデータに変換し(イヤホンを用いて)個人で聞く／聴くことを前提とする携帯型の機器は、音の記録／再生が大前提となる。その機能がなければ、なにもはじまらない。けれども、その機能がない時代があったことは忘れてはならない、今のカタチにたどりつくまでに、それなりの人類の英知と手間と時間を費やしてきたことも記憶しておかなければならない。空気の振動によって伝わる音とは、今、目の前にいる人、せいぜい数百メートル離れた人との意思伝達的手段でしかない。口述は筆記され、音は音符に翻訳され、後生に伝えられたが、口伝えや声帯模写といった特殊な例を除き、録音というテクノロジーの登場によって、音は音として記録できるように

なった、より遠くの人へ、この時代に存在しない未来の人へ、音のメッセージを伝えることが可能になったのである。

多くの発明物のように、だれが真の発明者？は諸説あるが、日本では西南戦争が起きていた1877年、アメリカで発明王エジソンが特許を取得したとされるのが、音を記録し再生することができる機械 = phonograph。当時は、円筒にスズ箔や蠟を染み込ませたボール紙を巻き付けて音を縦振動として垂直に記録し再生したが、その後のビデオレコーダーやDVDと同様に、新たに登場した横振動を蜜蠟を塗った水平の円盤に記録する型 = gramophone との業界標準の争いが起こり、ベルリナーによる水平回転方式の円盤型が勝利し、世界中で使用されることになる。日本においても、当初は、ホノグラフ、蘇言機、蘇音器、蠟管再生機等々と訳されていたが、1888年(明治21年)に蓄音機／器として、円筒型の輸入がはじまり、エジソンから明治天皇にも献上され、1903年には円盤型のレコードが発売されるようになった。時は進み、技術もどんどん進歩していく。回転方法は、手回し、ぜんまい、電動モーターへと変遷、アンプやスピーカーを用いることで音の大きさを増幅し、片面から両面へ、回転速度を遅くすることによって(1分間に78→45→33回転)、より長く(約2分から約40分へ)、モノラルからステレオへ、より良い材質のパーツ等を用いることによって、よりキレイな音を、録音／再生することが可能となった。硬質ゴムやカイガラムシの分泌物による樹脂から、軽くて丈夫なポリ塩化ビニールへと円盤の素材も変化し、より扱いやすくなっていった。一方、磁気によって録音／再生するテープが登場、音／音楽の世界は様変わりした。まずはプロ用の機材として用いられ、1960年代、小型のカセットに収納し簡便に扱えるようになった、録音／再生が一般に普及しはじめたのである。それとともに機器本体の大きさもどんどん小さく、出力方法もスピーカーからヘッドホン／イヤホンへ、1980年代には、音／音楽を気軽に屋外に持ち出す = モバイルの段階が訪れ、21世紀には、磁性体を塗ったアルミニウムやガラスの円盤

が高速で回転して(1分間に数千回転)光学的に録音／再生するデジタルなマシンへと変容し、何千何万もの曲を常に所持し、いつでもどこでも聞く／聴くことができるようになった、そして、ついには回転運動がないケイ素＝シリコンで、録音／再生する、だけでなく、さまざまな体験／表現ができる、デバイスという今のカタチに至る。

美学者、評論家、編集者、社会運動家、そして国会図書館初代副館長として図書館法の制定に尽力…、戦前・戦中・戦後の動乱の時代を生きたのが中井正一(なかい・まさかず／しょういち)である。言われる論理＝古代文化＝弁証、書かれる論理＝中世文化＝瞑想、印刷される論理＝近代文化＝経験／行動／機能／生産、と各時代のコミュニケーションの特色を独自に整理し、それらを統合する難解な「委員会の論理」を提唱したことで知られる中井は、それまで着目されていなかったラグビーのフォーメーションに美を見出し、スポーツの美学を論じ、知識人たちから非芸術と軽視されていた映画を、集団の美と評価し、しかもいわゆる他人事としての関わりではなく、自らもスポーツを楽しみ、自分でカメラを操り実験映画も制作していた。また、送り手と受け手とが対等で双方向な関係で、なんの偏向も生じさせない透明な無媒介の媒介をミッテル＝Mittel(それに対する一方向的な媒体をメディウム＝Medium)と呼び、旧来のアカデミズムによる学問＝知識人の専有物に疑問を持ち、安易な断定、センセーショナルリズム、単純化を特徴とするジャーナリズムも強く否定した。しかも、単なる概念や批判では終わらせず、思考のみにとどまらず実践することを試みた。1936年、松竹下加茂撮影所の無名俳優によって発行されていたミニコミ紙「京都スタヂオ通信」を基盤にして、タブロイド判(新聞紙1ページの半分)6頁、1部3銭(送料5厘)、月2回発行の「土曜日」を誕生させた。平易な文章を用い、すべての読者が記者／執筆者になることを目論み、京都市下京区のフランソア喫茶室をはじめとする京阪地区の喫茶店を販売拠点とし、当時の庶民のつぶやきによって紙面が構成されようとしたのである(最

大8000部発行、青森県の農村からも投稿されたという)。そのように多方面で活動していた中井が、78年前の1933年6月5日に、京都新聞の前身、京都日出新聞に「蓄音器の針」を寄稿した。

円筒型・円盤型どちらにしても蓄音機／器の原理は、音の振動が溝の蛇行として記録＝録音され、回転する媒体の溝に再生用の針が接触して、その振動を空気の振動＝音に変換して、人の耳に届ける。そして、その音質は、その材質(鉄、竹、サボテン等)、その太さによって異なったので、聞き手は自分の好みに応じて、その針を選択した(電気を用いない初期の蓄音機／器は、音量の調節も針の違いでおこなっていた)。当時の針は、すでにいろいろなメーカーから販売されていたが、すり減りやすく、すり減った針はレコードの溝をより削ってしまうために、聞く／聴く毎に針を毎回交換していた。中井は、その針に注目した、その針は型＝規格品である、と。前述のように各時代の機器が、各時代の音／音楽を記録／再生してきた。そのルーツとなる蓄音機／器は、当初は口述筆記用機等としても用いられたが、メインの用途は音楽の再生機として流通した。円盤型が円筒型に勝利した理由の1つが、その媒体のコピーのしやすさ(＝原盤をタイヤキ等をつくるようにプレス方式で大量複製生産が可能)といわれている。そして、その選択は新たな時代の到来をもたらした。印刷機の登場によって、大量の情報の伝達＝マスコミが誕生したように、蓄音機／器によって、それまでは目の前での実演＝ライブのみであった音楽を、その場に存在しない、遠くの／未来の人たちが、聞く／聴くことができるようになった。そのような音楽体験ができる機器が開発／改良／販売されるということは、大量に複製された音楽が流通する＝音楽を購入することが前提となる、音楽そのものが商品となった、新たな産業が誕生したのである。産業の多くは、同一のものを、より多く生産し、より多く売ること＝利潤追求を目的とする。特に、大量生産は、より効率的に稼働するために、その過程が機械化され、その商品および部品は、同一の規格＝均質なものとなる、そして、労働力も同

一のもの=標準を求められることになる。いわゆる個性は必要なくなるのである。中井は、そのような状況について、これまで人間は、まず個があって、個の可能性、独創性等から、未来が生まれてきた。型は、過去の規定、それは現在を強制することになる、それに従えば現在の不合理を飛躍することはできない、未来の展望はありえない、歴史の転落である、と批判したのである。

その中井の考えに、多くの人が同意をするかもしれない。しかし、個性とは幻想である、まずは規定ができてからこそその独創性、巷で強調される「世界にひとつだけの…」とは、努力をしない者たちを甘やかしているだけにすぎない等と反論する人たちもいるかもしれない。言いかえれば、あらゆる事象は、藪の中、十人十色、いろいろな見方／考え方ができる。たとえば、かつての蓄音機／器は進化し、そのデバイスで、「今、私たちは新聞を見る、雑誌を聞く／聴く、映画を片手に寝転がったり、電話で顔を合わせたり…」することができる。現在、社会の至る所でおこなわれている、それらの行為や可能性についても、「妙な手つきでさすっている仕草は気色わるいだけで、ぼくには何の感心も感動もありません。嫌悪感があります」「新製品にとびついて、手に入れると得意になるただの消費者にすぎません」と批判する人もいる。それは的確な指摘なのかもしれない、けれども、それは自分の経験だけを唯一の拠り所にする独りよがりな無知な発言なのかもしれない。つくる分野においても、無から有を産む、感性>技術、とみなされることが一般的であるが、「創造の源は記憶」「技術は繰り返せる感性」と語る、つくる人たちもいる。売る、においても、音楽の商品化だけでなく、昨今のそのコピーの流布による、いわゆる正規品の販売低下についても憂慮される、だが、リスナーたちが簡便に擬似的に音楽にアクセスできることを利用し、CDおよびその複製を宣伝物と割り切り、先祖返りのように、生ライブを貴重／贅沢な一期一会としてビジネスを展開しているアーティストたちもいる。さらに、迷走を恐れずに進んで

いけば、身の回りの生活を振り返ってみると、ある考えや意見が、状況や文脈によって、変更／偏向されることも珍しいことではない。近年、その活動が再評価される一方で、単なる楽道家、町人学者、ゴンタ(=やんちゃなはずら者)、マザコン、スネかじりと揶揄する人たちもいるかもしれない中井自身も、他の文脈では、これまでの個を重視した、天才／独創／唯美に対して、これからは集団＝組織である、と技術／模倣／社会的普遍的実在の価値を論じている。また、中井は、入試・就職の面接や商談やプレゼンや選挙演説等のコミュニケーション過程における、目的を成就するため＝他者に受け入れてもらうための嘘言の効能を説いている、嘘言は集団生活に欠かせない、世の中は嘘言に充ちている、と。そして(もちろん)別の場面では、その嘘言を否定していたりもする。実は、中井のさまざまな論考を読み進んでいくと、自らの論理の矛盾／改変を繰り返していることに気がつく。では、それは意図的なものなのか、それともその場限りのいいかげんな行為の結果であろうか。

そもそもいわゆる首尾一貫とは、ありえることなのか、そもそも一貫性自体になにか意味があるのであろうか。現実社会においては、議論も論議も一直線には進まない、蛇行も一時停止もする、目的地にたどりつかないことも多々ある。しかし、その前提となる、そのコミュニケーション活動とは、ひとつの結論にたどり着くまでの過程なのか、そして、そのひとつの結論とはすでに存在していて、その結論に、より効率的にたどりつけばよいのであろうか。約1500年前の南史を由来とされる「臨機応変」とは、ポジティブな行為なのか、あるいはネガティブなふるまいなのか。最近のコトバで言えば、会話の状況に応じて「(話を)盛る」は普通のお約束事になっている。それは許されないことなのか、それとも、その場を盛り上げるための、あるいは、KYとして避けられるのを防ぐための処世術として許容されるのか。他方、現在の欲求や成果をいくら集めたとしても、それは未来の現実とはならないのかもしれない。自分にとって真に必要なもの

に気がつくのは容易なことではないから、なんの衝突なく容易に受け入れられる新しいものは、本当は新しいとものではないのかもしれないのだから。しかしながら、自ら飢えることも馬鹿になることも容易ではないゆえに、流動する現実を、紋切型に、これが答えだ、と切り取り、なにかしらの使い古しの形式にあてはめ、あいまいさを排除する、というのが日常を(賢く)生きるということかもしれない。でこぼこな事実も、恣意的に取捨し並び変えれば、いびつでない平らな世界を構築できるのだから。けれども、無知蒙昧な常識に欠けた猥雑な天邪鬼は、その流れの中で素朴に立ち止まるかもしれない。ノイズは無駄=悪なのであろうか、余白のコミュニケーションは無意味なことなのであろうか、わかりやすい対義となるはずの介入の余地は、もう残されていないのであろうか、と。

さて、そのようなさまざまな解釈や混乱や疑問や愚問を生じさせることこそ、中井による大いなる挑発=思考の実践なのかもしれない(中井の矛盾は弁証法的な意味での矛盾であると指摘する者もいる、が、加国の英文学者や仏国の非構造主義者と同様に、そのうさん臭さ、そのいいかげんさこそが、カメラのような、かれの魅力なのではないか、と誤読するのは不正解であらうか)。いずれにしても、それらの判断=意見の選択は、それらに対峙する各人に委ねられている(はずである)。中井については、その著作や関連本は、図書館で無料で借りられる、お金を支払えば一般書店や古本屋を通して自分のモノにすることもできる、あるいはバーチャルな世界で「中井正一」と検索すれば、著作権が切れて合法的に電子化された多くのテキスト等をパソコンやスマートフォンで読むことが可能である。もし中井について、なにかしらの興味や関心を持ったならば、かれの思考/実践の記録と、予断や偏見も持たずに、ではなく、(普通の社会生活を営む以上、持たないことなど不可能なことなのだから)予断や偏見も持つことを恐れずに、そのまま向き合ってみる。分析や評価をしたい人は、各自ですればよい、難解だと思えば、途中

で投げ出してもかまわない、そのことばの連なりを目で追うだけでもかまわない。回転する筒／盤と針 = stylus の接触から音の記録／再生ははじまった。テープやハードディスクの時代は針ではなくヘッドが接触するようになった。レーザー光の反射を利用する CD で接触はなくなった、が、回転はしていた。シリコン機器には、もう回転もない、そして、音だけではなく文字も映像も素材となり、静電気を帯びているという規格に準じた指が新たな stylus になった、アナログ = 気まぐれな touch が、デジタル = あいまいでない data に、トリビア = 実はもっとも大事な feeling を残しつつ、変換されることによって。その新奇な世界では、直接的な接触は必要条件ではなく、さまざまな情報が時空を超えて瞬時に電送され、雲の中に大事なものを預けて、コピーやハイパーリンクを自明にして、対等であることを前提に、無邪気に、つながりあっている(と思っている)。一方、対抗するとみなされる既存の世界の特に極東の島国での情報との関わりは、せいぜい60年前からの体制や慣習を永遠のものと、勘違いさせようとするための企て、関わるのは面倒だから勘違いしようとする空気、それらを疑うこともなく当然として受け入れている人たちが、ますます余裕のなくなっていく日々の生活を平穩に過ごそうと苦闘している。私たちは、今、そんな世の中を生きようとしている、生きなければならない。それゆえに、わずか1000字ばかりの「蓄音器の針」を、なんのために中井は寄稿したのか、あるいは「土曜日」の巻頭言「生きて今此処に居ることを手放すまい」等は、なぜ書かれたのか、を、さらに、かれが活動したのはどんな時代で、社会になにが起きていたのか、当時の人たちが感じた不安とはどんなものだったのか、を、改めて、思い巡らすことも必要なかもしれない、今、私たちはどこに立っているのか、これからどこに向かって進もうとしているのか、を思考するために(それは無粋で危険な誘いな^{いざな}のかもしれないが)。

蓄音機／器について

森芳久・君塚雅憲・亀川徹2011『音響技術史：音の記録の歴史』東京藝術大学出

版会

レコード産業界の歴史(日本レコード協会)

<http://www.riaj.or.jp/chronicle/>

テクニカギャラリー／ギャラリートーク(株式会社オーディオテクニカ)

<http://www.audio-technica.co.jp/corp/gallery/index.html>

揺籃期のレコード業界(レコードの歴史)

<http://www.terra.dti.ne.jp/~yymatsu/recording/cradle.html>

ちこんきのたのしみ

<http://www.h5.dion.ne.jp/~chikonki/index.html>

蓄音機で聞く SP レコード鑑賞会

<http://www.gramophone.jp/>

(web サイトの URL は、2011/09/30現在のもの)

※中井正一の著作物、中井についての研究をはじめとする関連書籍のリストは、この拙文の読者は、もうすでに当然のようにそれらを読んでいるであろう、あるいは、これから自らの意志で試行錯誤しながらそれらにアクセスするであろう、を前提に、省略する(=不在という現前を選択する)。なお、後日、新たなカタチで、本文と共に、<http://bricolage.jp/design-not.html>にて公開予定。

